HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	可能表現の対照研究 : 日本語と英語を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	今泉, 智子
Citation	北海道大学. 博士(学術) 甲第13978号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/78336
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Satoko_Imaizumi_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：今泉　智子

学位論文題名

可能表現の対照研究―日本語と英語を中心に―

本論文は主に日本語と英語を研究対象とし、これらの異なる言語において「可能」という概念がどのように捉えられ、言語化されているかを比較することを通して、通言語的視点から、可能とはどのような意味なのかを考察するものである。

「～できる」といった可能の意味は、人間だけではなく生物が生きていくのに必要な基本的、普遍的な情報である。しかしながら、日本語と英語で可能を表す言語形式とその統語的な特徴には大きな違いがある。日本語の可能表現の一つである「られる」は、格の交替に関わるヴォイス構文を構成する動詞接辞であるのに対し、英語の可能表現の一つである can は、モダリティを表す助動詞であり、これまでそれぞれの言語において異なる文法カテゴリーの下研究されてきた。本論文は、同じ意味を表す形式がなぜこのように異なる文法カテゴリーにおいて論じられるのか、という問題を出発点とし、個別言語における考察だけでは捉えきれない、「可能」という意味の多面性に注目する。話し手が日本語話者であっても、英語話者であっても、表そうとする意味は共通に存在するはずである。しかし、話者が使用する言語によって、可能の概念のどの部分をどのように捉え、どのように言語化するかが異なると考えられる。そうであるならば、そこには言語による「捉え方」の違いが反映されていることが予測される。本論文ではこの「言語による捉え方の違い」に注目し、人間の認知の面から言語を研究する認知言語学的アプローチによって日英語の可能表現を分析した。

第１章では、本論文の目的と基本的な言語観、及び研究の意義について述べた。本論文は以下の４つの問いを明らかにすることを目的とする。①日本語と英語の可能表現形式が表す意味にはどのような側面があるのか。②それらの側面はどのように関連して可能という概念を構成しているのか。③日本語と英語は可能の意味（②）をどのように捉え、記号化しているのか。④日英語の可能の捉え方の違い（③）は、どのような認知プロセスの違いを反映しているのか。

第２章では日英語の可能表現の先行研究を概観し、それぞれヴォイス、モダリティというカテゴリーとの関連のもと、多義性や歴史的変化の過程を中心に整理し、問い①を明らかにした。そのうえで、ヴォイス、モダリティというカテゴリーに基づいた研究方法では、日英語の可能表現の比較対照を十分に行えないことを指摘し、文法カテゴリーを超えた研究方法の必要性を指摘した。

第３章では、それを解決する理論として、Croft（2001）の Radical Construction Grammar (RCG)が有効であることを示した。RCG は文法カテゴリーに基づく従来のトップダウン式の言語理論ではなく、通言語的に見られる言語の多様性から普遍性を導き出すボトムアップ式の言語理論である。さらに、RCG に基づく類型論的意味研究の方法の一つである意味地図が日英可能表現の対照研究に有効であることを述べた。そのうえで、問い②、③を明らかにするために行った量的調査（調査１・調査２）と、質的調査（調査３）の概要と結果を報告した。量的調

査では、中国語を分析対象に加え、統計的手法で日本語・英語・中国語の可能表現の意味地図を構築した。日本語原作の小説と英語、中国語翻訳テキストから収集した可能表現をデータとして、可能表現が用いられている文脈同士の意味の類似性を、三言語の構文の一致度から数値化し、多次元尺度構成法を用いて統計的意味地図を作成した。作成された三次元の意味地図の配置を観察したところ、概念スペースを構築する三つの軸は、「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」「即時性」と解釈できた。次に、調査２では英語原作の小説と日本語・中国語翻訳テキストをデータとし、同様の手法で意味地図を構築した。その結果、「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」については、調査１と同様の解釈ができたが、「即時性」については、調査１の結果を含め、この概念が適当かどうかデータから明確に判断できなかった。これらの考察から、日本語・英語・中国語の可能表現が表す概念スペースを構成する軸のうち、最も重要な二軸は「事態指向性／話者指向性」「コントロール可能性」であると結論付けた。これによって問い②が明らかになった。質的調査（調査３）では、量的調査で使用したデータの例文を直接観察し、各言語の可能表現に見られる特徴を分析した。その結果、英語では力動性の源となる動作主または使役者を主語とし、動作主の意志的な行為として表現する傾向が見られた。また、可能表現の中に仮定の意味が含まれ、出来事を非現実として捉えるという特徴が見られた。一方、日本語では動作の受け手の視点から、「ある状況が可能になった」と述べる傾向が強く、属性可能や実現可能等、現実としての可能を表すことができるという特徴が見られた。これらの特徴を、量的調査によって明らかになった二つの軸と関連付けると、英語は可能を捉える際に「事態指向性／話者指向性」の軸を中心に見るのに対し、日本語は「コントロール可能性」の軸を中心に見ていると言える。これらの考察から、問い③に対し、英語は可能概念の「“今ここ”にない出来事の発生」という側面を中心に捉えるのに対し、日本語は「“今ここ”の状況における知覚」という側面を中心に捉えるという解答を提示した。

第４章では、問い④を明らかにするため、第３章で明らかになった③の違いを、認知プロセスの面から分析した。まず、人間がものや出来事を捉え、他者に伝えるという過程はどのようなプロセスなのかをラネカーの認知文法におけるグラウンディングによって説明した。そのうえで、英語の可能表現である法助動詞の認知プロセスはグラウンディングによって説明できるが、日本語の可能表現はグラウンディングでは説明できないことを指摘した。そこで、中村（2004）の「I モード認知／D モード認知」を用いて分析を行い、「事態指向性／話者指向性」のスケールにもとづく英語の可能表現は、認知主体と事態とを対峙させて捉える D モード認知が前提となっているのに対し、「コントロール可能性」のスケールにもとづく日本語の可能表現には、認知主体と外界とのインタラクションを残した主客不可分な認知である I モード認知が強く反映されていると説明した。また、日本語の「られる」による可能・自発・受身の連続性についても、I モード認知のインタラクションを「認知主体と外界との間の働きかけと反応」として分析することで、「コントロール可能性」の度合いは「認知主体から外界への働きかけの背景化」の度合いとして統一的に説明できることを示した。さらに、両言語の可能表現は、その起源に思考や知覚等の認識に関わる動詞との関わりを持つが、そのような経験とその把握が融合する認知プロセスの概念化には、思考・知覚の経験としての I モード認知と、それを把握し他者に伝える言語機能としての D モード認知という二面性があり、それらが日英語の可能表現の根本的な違いの原因になっていることを示唆した。

第５章では、以上の考察をまとめ、本論文の最終的な結論として、「可能とは、“今ここ”にない出来事の発生を、認知主体が“今ここ”において知覚することである」という定義を提示した。最後に今後の課題を述べた。